途中下車

ロマネスク-10年後

一般社団法人　北海道植物防疫協会 常務理事
児玉　不二雄
Fujio Kodama

人目に触れることが少ない雑誌の、さらに片隅にささやかな文章を書いた。つまり以下は初出３点である。古物なので、自作にコメント（寸評）を付けた。

【綺麗な言葉－若茎】

ダイコンは“大根”で食用部分は根である。メロン、スイカは果実だし、トウモロコシ、コムギは子実だ。ハクサイ、キャベツは葉だろう。作物名はその食用部分を連想させる仕組みになっている。アスパラガスはどうだろうか。最近は通年収穫が広く行われ、やや季節感が薄れているが、やはり新鮮なあの若い茎を思い浮かべるのが普通だろう。さて、その呼び名のことである。園芸・植物病理研究者の間では、若茎と書き、“ジャッケイ”と読む。書き方はともかく、この読み方、抵抗があるなと、数年前から思い始めていた。そこで少し調べてみることにした。日本で初めてアスパラガスのモノグラフ（総説）を書いた北海道大学農学部教授（当時）沢田英吉によると、「アスパラガスの茎というのは、地中から発育してくる多肉質の太い茎を指す。これを若いうちに収穫すれば、いわゆるアスパラガスとなる。嫩茎（ワカグキ）、スペヤー（Spear）、ストークス（Stalks）などと呼ばれている。本書ではこれを若茎と呼ぶことにした（沢田英吉著　アスパラガス、誠文書新光社刊、1962年、34 p）」（児玉注：沢田原本には嫩茎のルビはない）とある。つまり“嫩”を“若”に置きかえている。また最近、明治時代の作品を読んでいたら、嫩葉とという漢語に,“わかば”と仮名が振ってあるのに出会った。そこで広辞苑を引くと、「わかば」：【若葉・嫩葉】：生えてまだ間もない葉。芽出しの葉。新葉」とある。この二つの結果を考え合わせると、“若茎”は“わかぐき”と読むのが妥当なようである。“ぐ”を正しく鼻濁音で発音すると、語感もいい。新鮮なアスパラガスによく似合う。この若茎は、古く“ドンケイ”と呼称されたことがある。これは、嫩茎を音読みしたもの。さらに、嫩を“鈍”に置きかえて、若茎のことを“鈍茎”と記述したアスパラガス栽培の普及本を見かけたことがある。

さて、作物名にもっとも権威ある日本園芸学会では“ジャッケイ”を正式な読みとしているようである。鼻濁音の“ワカグキ”を主張しても、「田作（こまめ）歯ぎしり」というものだろう。

〈寸評〉 この文章を書いたのは、2004年10月であるが、翌2005年９月に日本園芸学会が刊行した用語集（養賢堂）では、〈ワ行〉に若茎を並べてある。「ワカグキ」が日の目を見たわけで、ご同慶のいたりである。ただし仮名書きされていないので「ワカクキ」か鼻濁音の「ワカグキ」かは不明。鼻濁音が消滅に向かいつつある現下の趨勢では、「ワカクキ」に軍配が上がりそうだ。

【碩学の一言】

半世紀も前になる。小学校の上級生になり、家庭菜園の野菜作りが私の仕事になった。エンドウとナスは、２年以上続けて畑の同じ場所に植えてはならない、と教えられた。だから前年の作付図を頭に入れておくことは、大切な情報だった。連作障害との小さな出会いである。この話を枕に、ある新聞にエッセーを書いた。そしてナスではバーティシリウム菌、エンドウではアファノミセス菌が、この障害の病原菌だったらしいと結論した。たまたまこの文章を目にされたのが成田武四先生（元・道立中央農試病虫部長）で、植物病理学の碩学（せきがく）である。それが特徴の優しい小さな声で「大変おもしろく読ませて頂きましたよ。ちょっと気になることがあり

ましたが…」。碩学とは学問の神様の大番頭のような方のことで、とにかく怖い。その先生の「気になること…」は、「おまえは間違っておるぞ」と指摘されたに等しい。さらに何ともやりきれないのは、正解を与えず自ら解答を探させることだ。15年程前の話である.

農業試験場を退職して今の仕事に就き、あるキッカケから北大農学部の大学院生と豆類の発芽障害の研究を手掛けることになった。作付面積は少ないけれど、エンドウも立派な豆類の仲間である。かくて少年時代の連作障害に再会する。エンドウを一度栽培栽培した畑では、翌年は著しく発芽が著しく悪くなる。時には50%以下になることさえある。昨年から今年にかけて、その原因が土の中に生存しているある種のピシウム菌によることが特定された。つまり、エンドウの連作障害を起こす強力な第一撃は、ピシウム菌であって、以前私がそれが原因らしいと結論づけたアファノミセス菌は第二陣の後続部隊活躍のようである。15年もかかってしまった宿題の答えと、近頃入手した銘酒を手に、成田先生をお訪ねしよう。が、やはり怖くもある。

〈寸評〉 銘酒を持参してお話を伺う前に、成田先生は逝去された。答案の採点を受けることができなかったわけである。2008～9年に北海道ではダイズの発芽不良が大きな問題となった。ピシウム属菌が病原菌であり、「苗立枯病」（新称）と命名した。

【林間ニ紅葉ヲ焼ク】

「酒の追憶」という妙な題名の作品一を、太宰治が書いている。その中で冷や酒を飲むのは品がない、と言っていたように記憶する。そのせいでもあるまいが、日本酒は温めて飲むのが好きだ。中国の大詩人・自楽天も「林間二酒ヲ煖メテ紅葉ヲ焼く（＝山林で酒の爛をするのには紅葉をもってするに限る）とおっしゃっているではないか。さて、金曜日は朝から落ち着かない。メールが待ち遠しい。今夜は会えるだろうか。ほぼ月に一度の約束を心待ちにしているのである。おや、メールが届いた。「今夜一時間半くらいなら会えます。例の所にしますか。」とある。そそくさと仕事を切り上げる。今週の仕事は、来週に廻せば良いのだ。例の所で待つことしばし。相手が到着する。「今夜はおでんがおいしそう。私はビール。日本酒でしょう。いつもの爛酒で。」このごろはほとんどの店で、爛酒を“熱爛”と呼ぶ。“人肌の爛”なんぞは、死語なのだろう。いつかその熱爛を注文したら、沸騰した酒を出されて仰天した。香りが苦手という人が多いのだが、すこし煖めた日本酒から立ちのぼる香りは、とても良いと思うのだが。「平家物語に小督（こごう）という女性をめぐる、灼熱の恋物語があってね……」などと、唯一の愛読書をネタにした、毎回の似たり寄ったりの話に、相手は厭な顔をもせずに付き合ってくれる。若い女性の間でも辞書は愛されているのだろうか。「白川静さんの“字解”や“字通”は、眺めていて楽しい。発見が多いもの。広辞苑は古語が多いね」などと他愛のないやり取りをしているうちに、あっという間に一時間半はすぎ、「私、これから着付け教室なの。」と言い残して、さようなら。サヨナラダケガ人生ダ、これからが大人の時間さ、などと呟いてもう一軒。家に着くころは酔眼朦朧（すいがんもうろう）。おや、メールが着きましたよ。「ご馳走様。お酒もお喋りも楽しかったです。おやすみなさい、お父さん。」

〈寸評〉 一昨年ウィーンを覗いてみた。それ以来ドイツ語の話題が多い。Eitelkeit ist ein anderes Reizmittl zu Lüge.〔＝Vanity is another stimulate to tell a lie.〕、虚栄というものは、嘘をつくようになる今ひとつの刺激である〕：ショーペンハウワーかな？